

15 世紀末のフランドル絵画に見られる新たな画面空間構成法の発想源を求めて —— メムリンク作《キリストの受難》の場合

平岡 洋子 (東海大学)

本発表は、15 世紀末フランドルの、一画面に数多くのエピソードを描いた「総覧型」形式の絵画に見られる画面空間構成上の新機軸に着目し、新たな空間構成の発想源となったものを示すものである。

15 世紀初期フランドル絵画の伝統的畫面空間構成法は、重要な場面を配した前景の背後に、遠望される風景が後景として描き込まれる手法である。前景が室内の場合、その背後に窓や腰高の仕切りがあるテラスが置かれ、前景が戸外の場合は、背後に小山や土手が配されて、両者共にその隙間から遠くの風景が望まれる形である。

15 世紀末には、上記の、中景を排し前景と後景を直接接合した「前・後景接合型」とも言うべき形式を脱する新たな画面空間構成が現れた。それは、数多くのエピソードを一画面に散りばめた聖人伝主題の絵画や、物尽くし的に多くの事象を羅列して語るタイプの絵画の「総覧型」形式に現れた。説話をこのような形式で描く手法が求められた背景には、絵画を前にして、瞑想の中で聖人の殉教の物語やキリストの受難の跡を辿り、共感し、一体化することを勧めた新しい信仰運動の隆盛と精神的巡礼の勧めがあった。そこで、「総覧型」の、前・中・後景がなだらかに繋がる総体的に構成された画面空間が必要となった。

発表では、このタイプの最も早い例、メムリンク《キリストの受難》(1470-71 年頃) を取り上げ、キリストの受難伝が展開される舞台として描きこまれたエルサレムを思わせる都市に、フィレンツェの建築物、建築を飾る浮き彫り彫刻、ベノッツォ・ゴッツォリの《マギの旅》の図像などを祖型としたモチーフが使われていることを指摘することで、メムリンクがフィレンツェでこれらの作品に接し、またフィレンツェの都市景観を描いた壁画にも接して、新たな空間構成の発想源とした可能性があることを提示する。

フランドル絵画史上、「15 世紀の初期フランドル伝統から、15 世紀末に初期フランドル伝統を超えて 16 世紀の様式へ」という展開には、二筋の流れが認められる。一つは、P. フィリッポが述べた「イタリア主義受容への流れ」で、初期フランドル様式に続いて、15 世紀末にフランドル伝統を脱する兆候が現れ、16 世紀のロマネストによるイタリア主義導入へと繋がる道筋。もう一つは、本発表が初めて提示する、初期フランドル様式から、15 世紀末の「総体的画面空間構成」の時代を通過して、16 世紀の「鳥瞰図的空間構成」の出現へと至る道である。

発表者は後者の展望の下、「総覧型」絵画が初期フランドル的空間構成を脱し、総体的空間構成を実現したという点に、15 世紀末に既に 16 世紀に繋がっていく新たな造形言語が胚胎していたことを示したい。また、それを可能にした空間構成上のいくつかの発想源の一つを《キリストの受難》において示すこととする。